

田口佳史著「東洋からの経営発想」悠雲舎 2009年7月31日刊を読む

## リーダーシップの本質

1. (1) 中国古典思想の本義は、「人間の救済は人間のみ可能」というものです。古代中国人はとくに神仏に頼ることを止め、人間に期待するというリアリズムを確立しました。
  - (2) やはり自分達の幸福は、立派なリーダーを得るかどうかで決まるのだという確信です。
  - (3) そうなると問題になるのが、いかにリーダーを育成するかにかかってくるのです。
  - (4) たまたま、偶然に、幸いなことに、名リーダーに恵まれたということでは、断じていけない。何故ならば、多くの国民を幸せにするために国家の体制があり、政治があるのだ。それらを動かすために存在する最も重要な要素であるリーダーが、たまたま恵まれたなどという頼り無いことで良いわけではない、と考えたのです。
  - (5) そこで意図的にリーダーの育成を行うことが最大の案件となり、そこに確立したのが「四書五経」による人材の育成のシステムなのです。中国古典とは、人材育成のための教科書なのです。
  - (6) 世界広しといえども、リーダー育成のために生まれた思想、育成教育体系、そして教科書と、これ程までに完成度の高いものはないでしょう。
  - (7) これを十分に活用して我国独自の伝統精神文化と融合させたのが江戸三百年を支えた教育体系なのです。
  - (8) これ程の質と量を誇れる教育体系を、明治で捨て、戦後は完全に無視しているのですから驚きです。
  - (9) さて、内容へ入りましょう。
- まず、ではどの様なリーダー像を描いているのでしょうか。

## 2. 「放勲は欽明、文思は安安」

「書経」堯典第一節の巻頭を飾る名文で、理想のリーダー像を端的に言い切っています。

- (1) ①放勲欽明とは、その功績は誰の目にも明らかだ、ということです。ということは、やはりリーダーは、功績、武勲であり、政治的成果でもありますが、これが明白でなければならないのです。
- ②ということは、やはりまず世俗的な意味での手腕、豪腕、手練手管が冴えていなければならないということです。問題を解決するのが役割なのですから。
- ③しかし、それだけでは真のリーダーとはいえません。
- (2) ①文思安安とは、思いやりにあふれているという意味です。相手の立場や気持ちを理解してあげようという気持ちを常に持っていることで、やはり儒教的人物の核を成す「仁」、他者の幸せを願う愛情、または「忠想」、まごころをもって思いやる心などを表しています。
- ②現代的にいえば、「強さと優しさ」ということになりますが、この一見相対を為すこの両者を合わせ持っているのがリーダーであります。
- (3) ①もう一点は、「道」に通じていること、つまり「道徳」に富んでいなければなりません。道徳というと、モラルと解釈して倫理的な面ばかりを強調しますが、そもそも道徳とはそ

んな貧弱なものではありません。

②動態的(ダイナミック)で精力的(エネルギー)な創造活動という意味があります。

特に「徳」とは、中国古典の中心的概念ですが、昔はこれを「いきおい」と読み、リーダーは天地に充満するエネルギーをどんどん国民の暮らしに供給して、疫病や災厄、飢饉を回避することを役割としていました。

③また、徳のある人物とは、「自己の最善を他者に尽くしきる」ことをもって自己の使命としているもので、だからこそ多くの国民の上に立ってひたすら他者のため、公益のために働くことができる人のことをいいます。

3. では、こうしたリーダーをどの様に育成したのでしょうか。

(1)①まず「学ぶ」ことの意味を明確にしました。

②人間は何故学ぶかといえば、「明德を明らかにするため」、つまり先述の徳を身に付けるためとしました。

(2)①そのためにはまず、「修己治人」リーダーとは、まず自分が制御できること。何故ならその様な人間でなくては他人は治められないからです。

②そこで重要になるのが、「克己復礼」ということです。

③とかく我儘になりがちな自分に克つこと、また社会秩序の源泉である礼儀の本質をよくわきまえていることです。

④江戸期の教育においては、元服の十五、六歳までに、したがって「克己復礼」を成し遂げることを必須としました。

4. (1)①そこでまず、四書五経でいえば、「大学」を読みます。順次「論語」、「孟子」、「中庸」と進みます。

②四書から学ぶところの中心は、「人間性」と「社会性」です。

③ここの要点は、常に「自己に反る」つまり「自反」ということです。

④天下をよく治めて天下平安にする、あるいは国を治めて政治を行う志は、それはそれとして大切ですが、必ず自分に反ります。

⑤何故かといえば、自分の手に常に改革の手綱を握っていることこそが、政治の要諦と考えていたからです。

⑥平天下のためには治国ができていなければならない。治国の為には、齊家が成っていないとならず、そのためには「修身」、自分の身が修まっていることが原点で、必ず天下国家という問題も、その出発点は自分とします。

⑦自分であれば手に負えるからです。やり様があるからで、いきなり天下国家などといっても、それは無理というものです。

(2)①つまり中国古典の教育体系の基本は、常に現実的な解決策を見失わないことにあります。

「企業は人なり」といわれ、人材の重要性はいわれて久しいものがありますが、その方法論については、決め手に欠けているのが現状です。

②益々人材は重要になります。今後は意図的に的確にリーダーを育成して行けるかどうか自社に命運がかかっています。もう一度この我国の伝統的なリーダー育成教育体系に学ぶことも必要なのではないのでしょうか。

[コメント]

中国古典の「四書五経」をリーダー育成のための教育体系として活用した江戸時代中期から明治維新にかけて活躍した人々が、日本の歴史をつくったことは高く評価されるべきと私も考える。それらのすべてを明治は捨て去り、戦後は全く無視したことが、今日の日本のすべての年代での「だらしなさ」を生んだのかもしれない。「新しい公共」などという概念を持ち出さなければ国家が運営できない状況をもたらしたのは、明治以降の精神的退廃かもしれない。そろそろ、本当の議論を「四書五経」に立ち返ってすべき時期かもしれない。

－ 2012年4月27日 林 明夫記－